就任の言葉

手づくりの味

岡野久二

過去十数年来、私たちの衣食住は昔とは比較にならないほど簡便になってきています。食物に例をとれば、インスタントなものが増えて、少し手を加えれば三度の食事もインスタント食品で賄うことができます。調理法も便利になって、電子レンジなどを使用すれば数分間で食事ができ上がります。衣服にしても、既製服の種類とサイズが多様になってオーダーメイドの必要はほとんどなくなってきています。気の向いた時に好きな衣服を手軽に店頭で手に入れることができます。特異な体型の人か、好みのうるさい人でなかったら衣服は既製品でじゅうぶん間に合います。住居でさえも、プレハブ式のものなら数日間で我が家を持つことが可能です。つまり、機械文明が高度に発達した結果、生活必需品が量産されるようになり、生活が簡便容易になってきたのであります。この生活の簡便化は私たち、特に家庭の主婦の労働軽減に大いに役だっています。そこから起こる余暇の利用が女性の教養、文化の向上を促している事実は否定できません。

しかし、工業製品の大量生産がもたらす生活の簡便化は、同時に、社会生活の規格化（standardization）に繋がってゆきます。その象徴的な例は、最近の女性の衣服のファッションに見られます。ミニ・スカートが流行すれば、全国いたるところで女性は短かいスカートを身につけています。ブーツが流行れば、どこの町もブーツを履いた女性で溢れています。マスコミがこれらの流行を促進しているのですが、その結果、人間の個性とか、地方色とかはまっ殺され、果ては、人間性まで踏みにじられ、私たちの精神構造まで画一化してしまう危険があります。

こうした社会生活の規格化の問題は、アメリカでは、すでに一九二〇年代に文学作品に取り上げられています。一九三〇年にアメリカ作家として最初のノーベル文学賞を授与されたシンクレア・ルイス（Sinclair Lewis 一八八五―一九五一）が一九二〇年に発表した「メイン・ストリート」（*Main Street*）にこの問題が描かれ、規格化された社会の浅薄さが攻撃されています。この作品は、今世紀初頭のアメリカ中西部のある田舎町を舞台にして、大学出で理想家肌のインテリ女性が医師と結婚して、夫の町を改革しようとするが、彼女の計画はすべて因襲的な田舎町の人たちには受け入れられず、最後には、不本意ながらその町の空気と妥協してしまうプロセスを描いています。ルイスはこのミネソタ州の架空の町ゴウファー・プレアリー（Gopher Prairie）の「メイン・ストリートはあらゆる町のメイン・ストリートの延長である」として、アメリカじゅうの町や村がこの田舎町と共通するものをもっていると主張しているのです。「アメリカの町は、その十分の九までがまるで同じなので、町から町へさまよい歩いてみても、たいくつ以外の何ものでもない。ピッツバーグの西では常に、いな、その東でもしばしば、同じ材木置き場、同じ鉄道の駅、同じフォードのガレージ、同じ乳製品販売所、同じ箱のような家屋と二階建ての商店が見い出される。……商店はといえば、どこの店にも国じゅうに広告されている、同じ規格化された商品が並べ立ててある。」（「メイン・ストリート」第二十二章）この

ような情景が現在の我が国に見られないといえるでしょうか。むしろ、ルイスの指摘する規格化がますます助長されているのが実状であります。

こうした大量生産による社会生活の簡便化、規格化に対する反動から、最近は、やけに、「手づくり」という言葉が使われだしています。食物などに使われることが多いようですが、これはインスタントなものでないことを強調するためのようです。ときに、「手づくりの家」などという広告を目にすると吹き出したくなりますが、しかし、この「手づくり」ということは、量産化の進む現代においては、いま一度じっくり味わうべき言葉ではないでしょうか。特に、教育、研究に携わる私たちにとっては、ないがしろにできないことのように思えます。明治八年に同志社英学校の名のもとに、八名の学生から発足した同志社は、百年後の今日、二万人を超える学生、生徒を擁するマンモス学園となっています。学園の成長発展は喜ぶべきことですが、それは質を伴った量でなければなりません。新島先生の書簡の中に見られる次の言葉は、現在の私たちに対する警鐘のように思えます。

「学校も機械的の製造場に漸々流れ行くは、生徒の数も増したるより、自然の勢ひにして止む能はざる所もこれ有るべく候へ共、小生平素の目的は、成る丈け法を三章に約し、我が校をして深山大澤の如くになし、小魚も成長せしめ、大魚も自在に発育せしめ、小魚たるも大魚たるもその分に応じ、その身を世に犠牲となし、此の美しき日本を早晩改良して、主の御国乃ち黄金時代に至らしめん事は、小生の日夜熱祈して止まざる所なり。」

小魚にも、大魚にもその分に応じた教育をすることこそ、教育における「手づくりの味」であり、そうした教育環境を作ることが私のこれからの責務だと考えています。

（同志社女子大学長）

就任と回顧

野村芳雄

私が同志社中学に入学した昭和二年、時の総長は海老名弾正先生で、みごとな白い顎ひげを動かしながら朗々たる美声で講話をされた。そのころ、ハワイから宗教主任として迎えられた堀貞一牧師の烈火のごとき説教により、多くの若人は奮起させられ、いわゆるリバイバル運動が起こった。放課後しばしば全学的精神講話がチャペルで行われ、社会事業家の賀川豊彦、救世軍中将で平民の福音を説く山室軍平、秋吉台の聖者といわれ囚人保護に当たった本間俊平、盲目の哲人岩橋武夫、文豪徳富蘇峯その他の当時の名士が次々と講壇に立ち熱弁をふるった。そして場内に立ちこめる熱気を鎮めるように夕陽が青赤緑の窓ガラスを通して静かに流れるころ、聴衆は各々感銘をかみしめながら家路へ散って行った。

創立以来同志社の学風に大きな影響を与えてこられたラーネッド博士が帰国のとき、人力車に乗り神学館から西校門に去って行かれるのを、私たちはチャペルの傍らの木蔭でいつまでも手を振って見

送った少年のころの思い出など尽きない。

昭和三、四年ころは、ラグビー・野球・庭球・ボート・武道等あらゆるスポーツが盛んであり、学内には個性に富んだ先生がたが多く、独特の指導が行われ、人間性が尊重され、自由の気風が横溢した黄金時代であったと思う。

しかし昭和五、六年ごろから、時代は急速に軍国主義に傾斜して行き、総長は海老名弾正から大工原銀太郎（前九州帝大総長）に、また中学は、末光信三学長から野村仁作学長（元海軍大佐）に替わっていった。当時私は生徒会委員だったので、敬慕してやまない篤信温厚な末光学長が軍部の圧力によって女子部へ更迭させられるのを黙視できず、委員会に諮りストを構えて留任運動を計画したが、先生がたの耳に入り、多くの先生たちに囲まれ、「今ストを行えば同志社はつぶれるぞ！」とその非を諭され、ついにやむなく末光学長を女子部へお送りすることになった。そのとき、涙とともに読み上げた「送別の辞」を、末光先生はいつまでも、お宅の机の中に保存され、「中学で涙で送られた直後、女学校では歓声で迎えられ、あの日ほど処を異にして明暗を大きく分けたときは無かった」と語っては、それを見せてくださるのだった。

私は同中を卒業後、京都師範本科二部から専攻科へ進んだが、既に受洗し、日曜学校教師や路傍伝道などを行っていたので教官に呼び出され、「天皇とキリストとどちらが尊いか」などの愚問や詰問を受けたり、軍事教練ではだれにも増して猛訓練を受けたこともあった。京都での教員生活を三年でやめ、東京音楽学校へ進んだころ、戦雲は重く垂れこめ、繰り上げ卒業や学徒出陣が続く中で私は近視の故に丙種第二国民兵編入で戦場に出ず、四年間ゆっくりと、主として平井康三郎氏に作曲を学ぶことができたことは幸いであった。

しかし終戦直前の東京大空襲に遇い、すべて灰燼に帰した。中でも作曲学講義ノートと、借金して

買ったドイツ製ピアノを失ったことは残念だった。命からがら裸一貫で京都に逃げ帰ったとき、母校同中に恩師前窪勝之助校長・加藤延雄教頭（後に校長）が迎えてくださったことは非常にありがたかった。二年後学制改革とともに末光信三校長により女子中高に招かれた。かつて涙とともに送った末光先生から微笑をもって迎えられたその感激は大きかった。

その後、永島嘉三郎・堀数馬・仁井国雄・木下信夫の各校長の下に三十一年間、微力ではあったが力の限り音楽を通じて女子教育に打ち込んできたつもりである。

今も校長室の机の前に恩師末光校長のお写真が私を見守り、また同中での恩師原忠雄（牧師）先生に賜った聖句「神はわたしの牧者であってわたしは乏しいことがない。」（詩篇二十三篇）、「もし神がわたしたちの味方であるなら、だれが私たちに敵し得ようか。」（ロマ書八―三十一）が語りかけて励ましているのである。回顧を終えた私は今、輝く未来の展望台に立っている。

（同志社女子中高校長）

幼稚園長に就任して

望月満子

同志社幼稚園長をおひき受けすることになった。あまりに突然で、思いがけないことであったので、お仕事の内容などあまり考える暇もなかったが、やがていろいろの心配が起こってきた。一カ月

が過ぎた今、この気がかりや、楽しみ、喜びなどの経験を記してみたいと思う。

私は長女であったので、妹や弟などが下にあったのであるが、そのころは私も小さかったし、いわば同類である。大きくなってからは、私は今まで独身であり、妹は早く、弟は戦時中に亡くなり、下の弟には子供がないので、周囲は全く大人ばかり、しかもその上に学校で接するのは大学生ばかりであるから、小さい子供にうまく話しかけることができるだろうかというのがまっ先の心配であった。私は、これは与えられた試練であり、より大きな社会の中に生きてゆけるようになる上よりの恩寵であり、一度にたくさんの子供を与えられたことを喜ばねばならないと思った。

そもそも、人間の性格の基礎は五、六歳にでき上がるということであるから、この年の子供らを預かることは大へんな仕事である。幸い、この道の専門家である五人の先生がおられるが、私は全くの素人であるから今後はいろいろと新しいことを知るように努力しなければなるまいと覚悟している。園史によると、明治時代の献身的な宣教師たちがこの幼稚園を創設して、いろいろの面で苦労され、同窓会の諸姉も大へんに骨折ってつづけてこられたということである。幼児保育の重要さを知っておられた学園内の著名な宣教師や同窓の諸姉のあとを継ぐ強い信仰や力量が自分にはないように思い、恥ずかしく、つらく、悩んだが、もう進むより他はないのであり、私はこの使命のためにできるかぎりの努力をしてゆく決心をしている。

入園式の日が来た。今まで経験したことのない光景を見た。二、三の子供が泣いて式場に入ることを拒んでいる。それを先生がたは懸命に説得しようとしているのだが、子供のほうは頑固である。ある子供は母親の膝から降りようともしないで、式後の全員の記念写真の撮影が終わっても母親にしがみついていた。私は、今まで書物によってのみ知っていた幼児の精神的な発達の理論を、実地に見せてもらったように思えて、感激した。

この現象はさらにつづいた。幼稚園が始まって一週間ほどの間、いつも玄関の入り口の扉に額をおしつけて泣いていて、皆の仲間に入りたがらない子供、「ママ、ママ」と泣きながら廊下をうろうろする子供、おもしろいことに、これらは皆男の子ばかりであった。この後者の子供を、私はがん具箱の傍らへ連れて行って、いっしょに遊んだ。この子は、まな板、なべ、茶わん、ガスこんろをとり出して、一人で遊びだした。小さいながらも常に母親のすることを鋭く観察しているのであろう。たきながら鍋に調味料を入れる手つきなど、堂に入ったものである。私は、大人の日々の行動が、いかに純真な子供の心に映るかを、目の当たりに知らされた。子供は純粋であるから、どんなことでも受け入れてしまう。大人はこの純粋さを失ってしまっているので、何ごとでもいちおう疑ってかかるうえに、受け入れない場合が多い。もちろん、これはこれとしてたいせつなことではあるが、幼な心の美しさは、そのままイエスの言葉に通じる。「心をいれかえて幼な子のようにならなければ、天国にはいることはできないであろう」とは、信仰の真髄である。また、かの英国の詩人ワーズワースの言葉「子供は大人の父」も、このごろは身にしみて感じている。出町かいわいを歩いているとき、不意に、「園長先生こんにちわ」と言われることがある。その呼ばれかたに少なからぬ狼狽を感じないわけにはゆかないが、それより多くの、なんとも言えない喜びが心の中にあふれてくるのが、私のこのごろである。

（同志社幼稚園長）